

## 「312年のコンスタンティヌス軍」画像補遺

豊田浩志

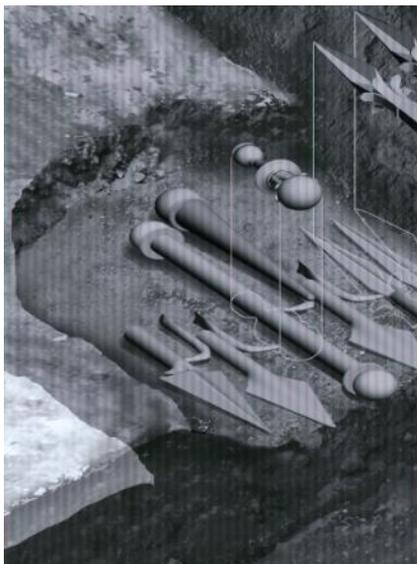
以下、著者自身の撮影（\*印）を除き、大方の参考画像はウェブからキーワード検索で入手しました。その性格上、情報源を逐一明記していない（できかねる）ことをお断りしておきます。逆にいうと、丹念にキーワード検索すればどなたでも入手可能です。

### 一 史上初めての出土遺物品 2 例

#### パラティヌス丘発掘箇所

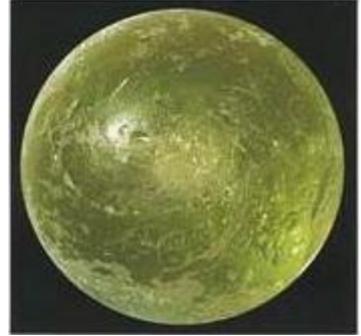
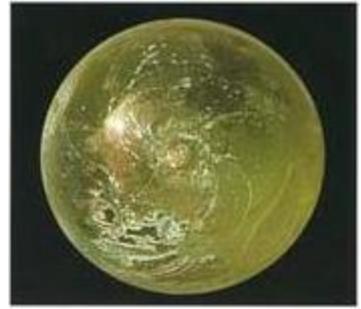


赤丸が出土地点 ↑



Gli oggetti ancora in situ in corso di scavo

図1 パラティヌス丘東端での出土状況図



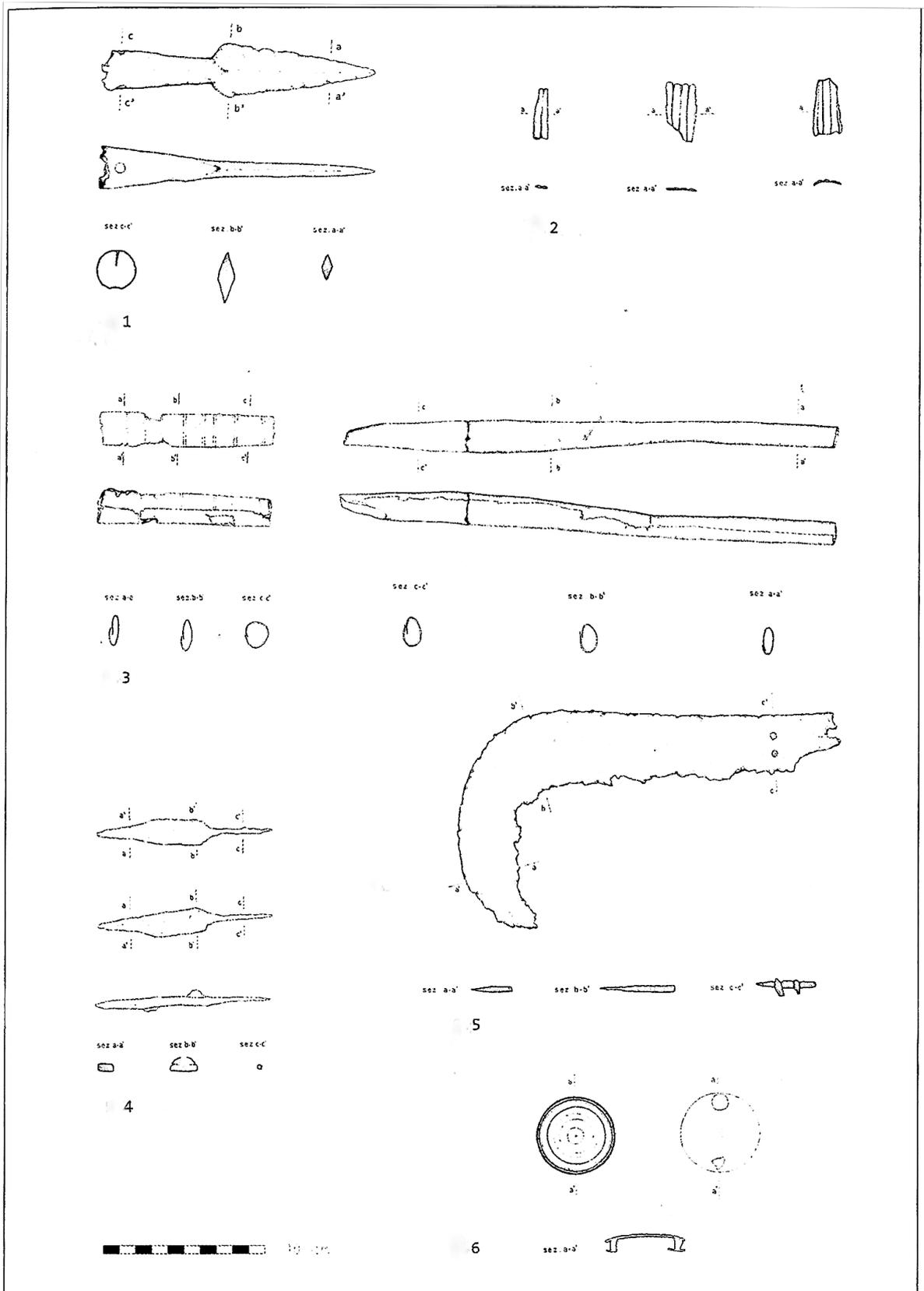
## ミルヴィウス橋発掘箇所

発掘現場

逆三角形の区画 ↓



図2 ミルウィウス橋近くの出土品

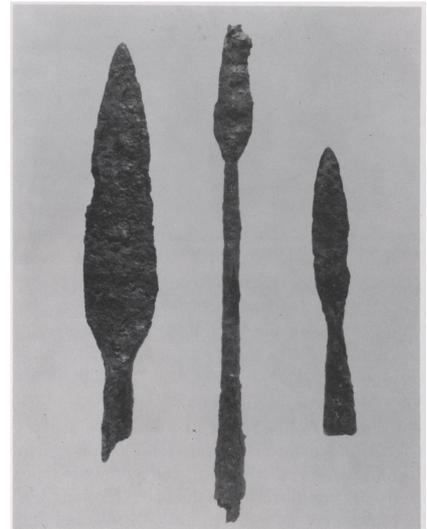


(disegno di Massimo Sabatini).

① 槍の穂先 (図 3.1)



Fig. 8-9.1 - Punta di lancia di forma romboidale (foto Cinzia Palombi).



Two iron spearheads and an *angon*-head, found at Astwick, Bedfordshire. (British Museum)

他からの *ango* 出土類例

② 3枚の銀鍍金された薄い金属板の断片三枚 (図 3.2)



Fig. 10-9.2 - Lamine argentate pertinenti ad elmo ad arco (foto Cinzia Palombi).

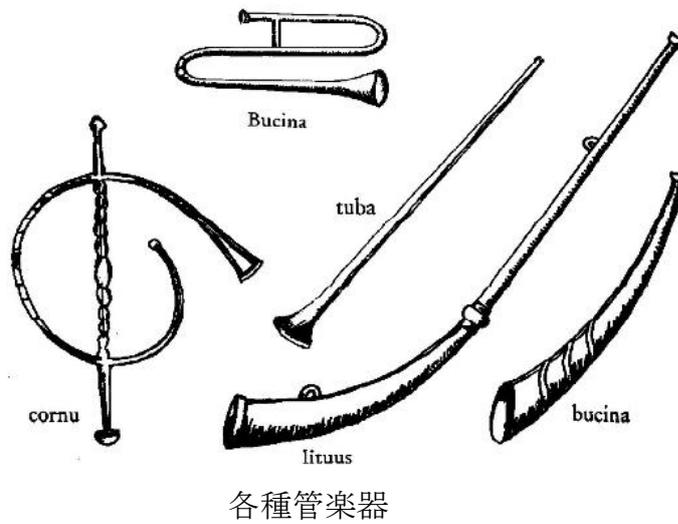


他からの復元・出土類例

③ 管状部品 3 点 (図 3.3)



Fig. 11-9.3 - Lamine bronzee tubolari pertinenti ad uno strumento musicale (foto Cinzia Palombi).



各種管楽器



トウバを吹くローマ軍兵士 (ルドヴィシの大石棺) \*

④ 矢尻 (図 3.4)



Fig. 12-9.4 - Punta di freccia (foto Cinzia Palombi).

⑤ 鎌状の槍 (刀剣?) の先端 (図 3.5)

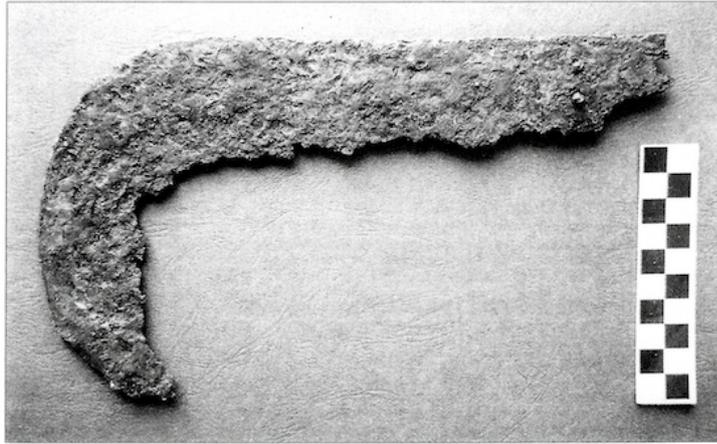
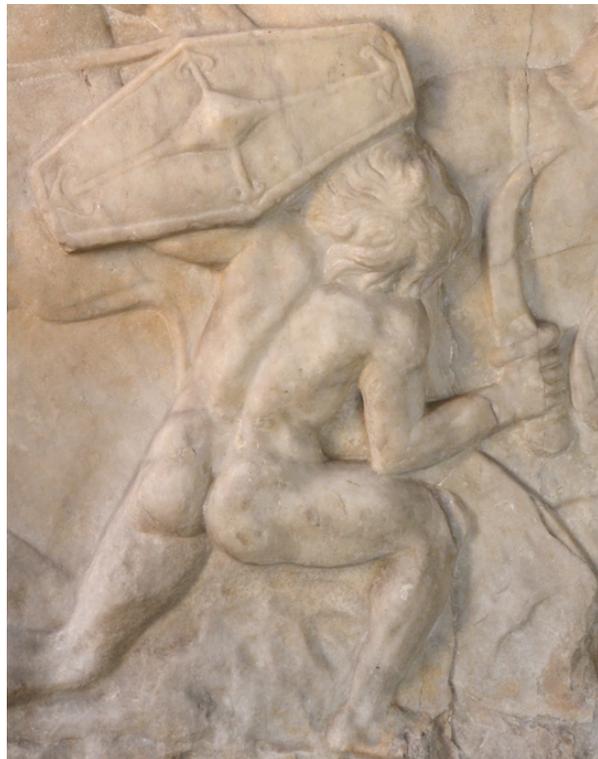


Fig. 13-9.5 - Punta di lancia a forma di falchetto (foto Cinzia Palombi).



アダムクリシでのシッカ



ルドヴィシの小石棺でのシッカ\*



シッカを構えるダキア人想像図  
⑥ 青銅製のファレラ phalera の飾

り 鋌

(図 3.6)

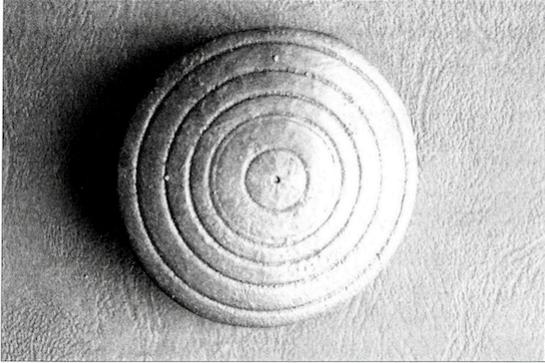
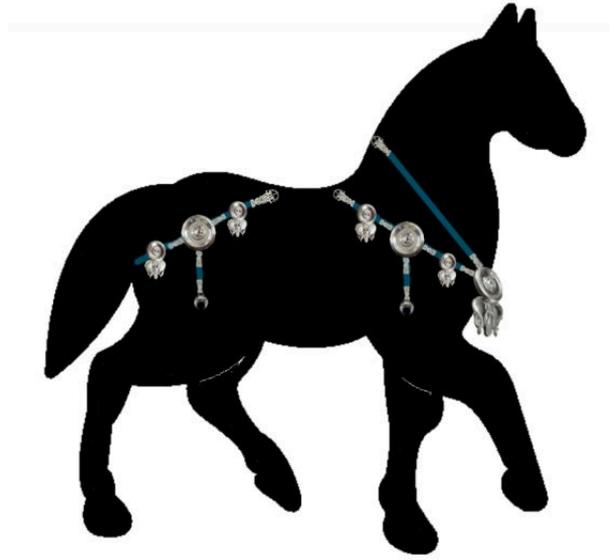
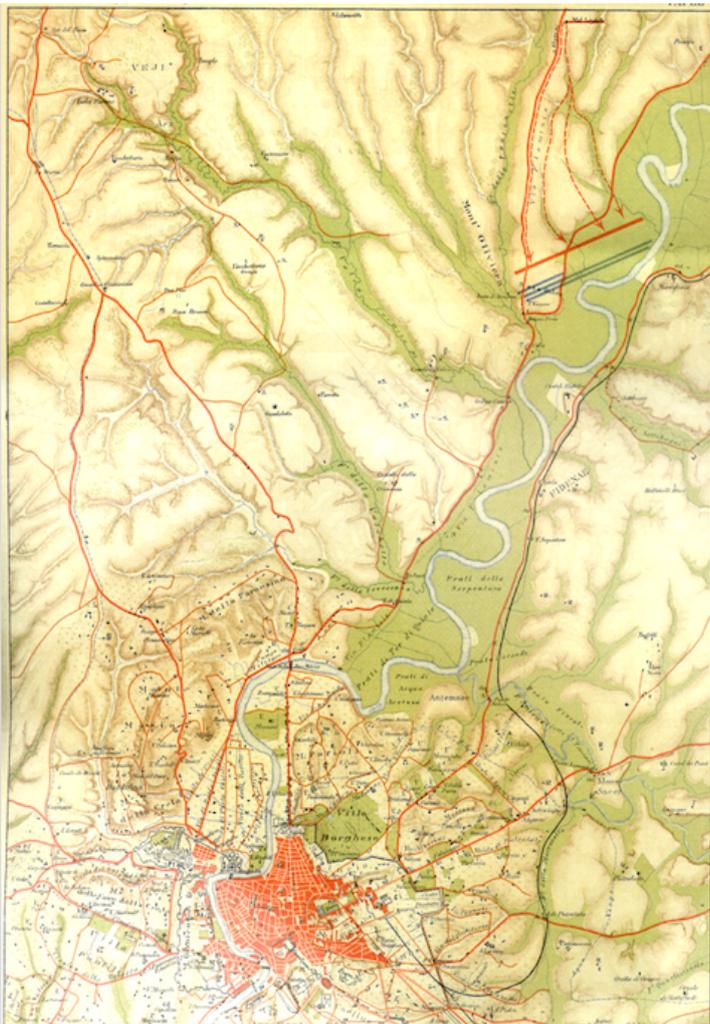


Fig. 15-9.6 - Borchia decorativa di falera (foto Cinzia Palombi).



装着想定図

## 二 歴史的事実を求めて



フォン・モルトケ作成の緒戦布陣図

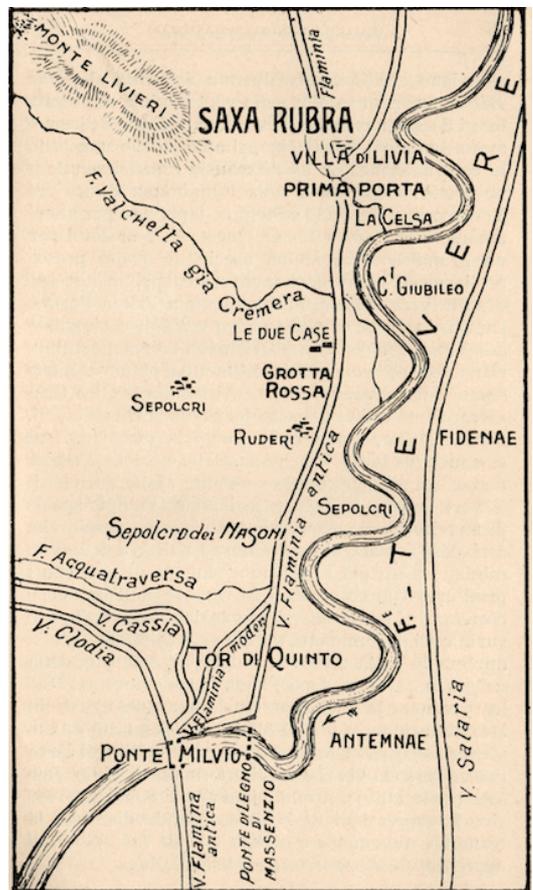
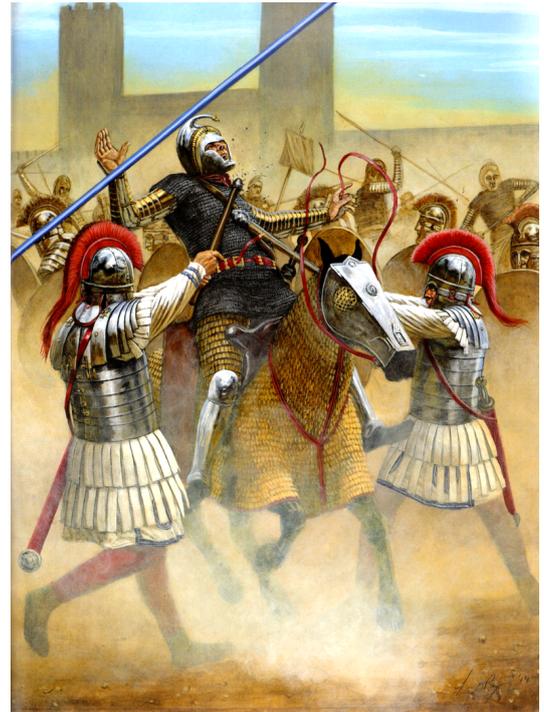


図3 ローマ近郊のフラミニア軍道とテヴェレ溪谷



図4 コ帝進軍経路



トリノ戦でのマ帝軍重装騎兵部隊制圧想像図

Malborghetto と四面門 (古写真は、本文註6掲載の Fritz Toebelmann 掲載のもの)



コ帝軍滞陣の Malborghetto からテヴェレ川方向遠望す：20 世紀初頭



四面門遺構 ↑

遺跡公園のパノラマ写真



4世紀半ばに Malborghetto に建設された四面門復元図



四面門現況（南東から見る）

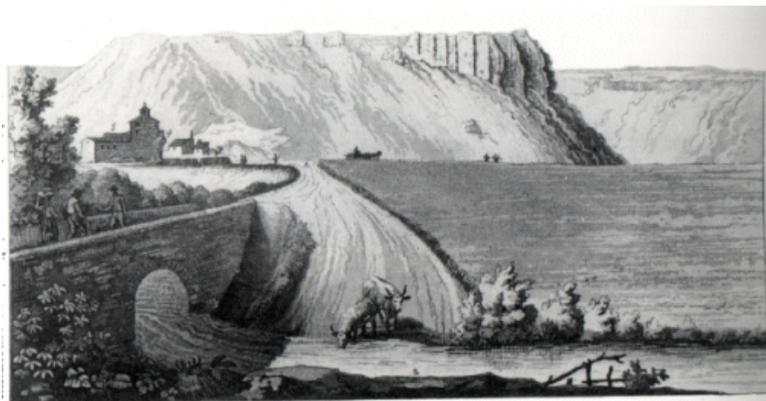
Prima Porta



1660年頃のプリマ・ポルタ：「門」に注目



「門」遺構の現況



プリマ・ポルタとリウィアの別荘擁壁を描いた1828年の挿絵



別荘擁壁の現況\*



中央左にテヴェレ川と自動車道（旧フラミニア街道） 中央遠景がローマ：リウヴィアの別荘からの眺望＊

### 戦場風景



マ帝軍布陣地点のパノラマ写真（20世紀初頭）

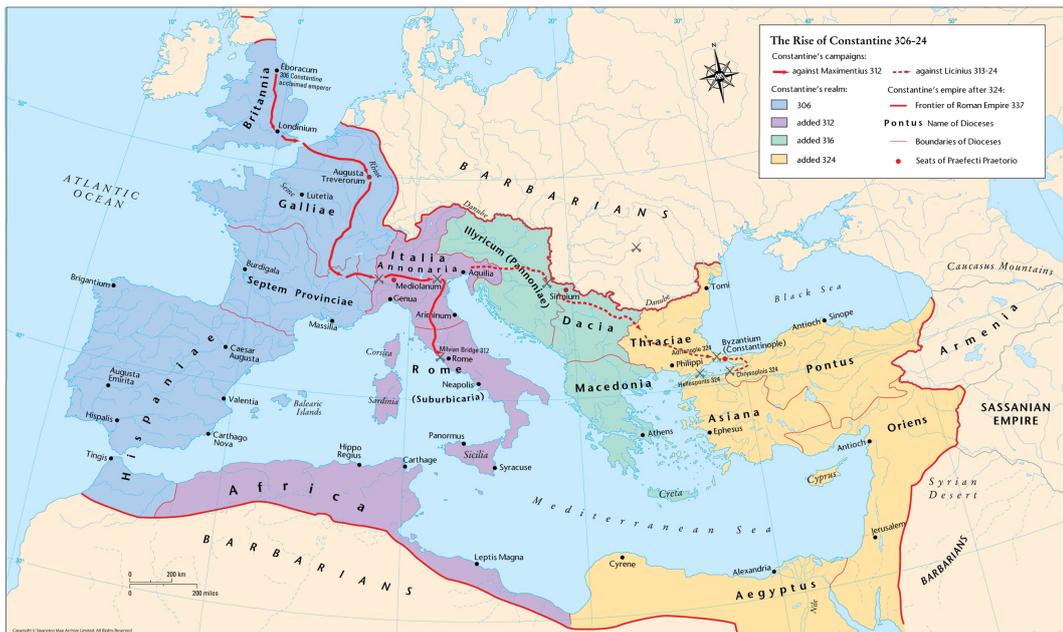


現代の大墓地 ↑

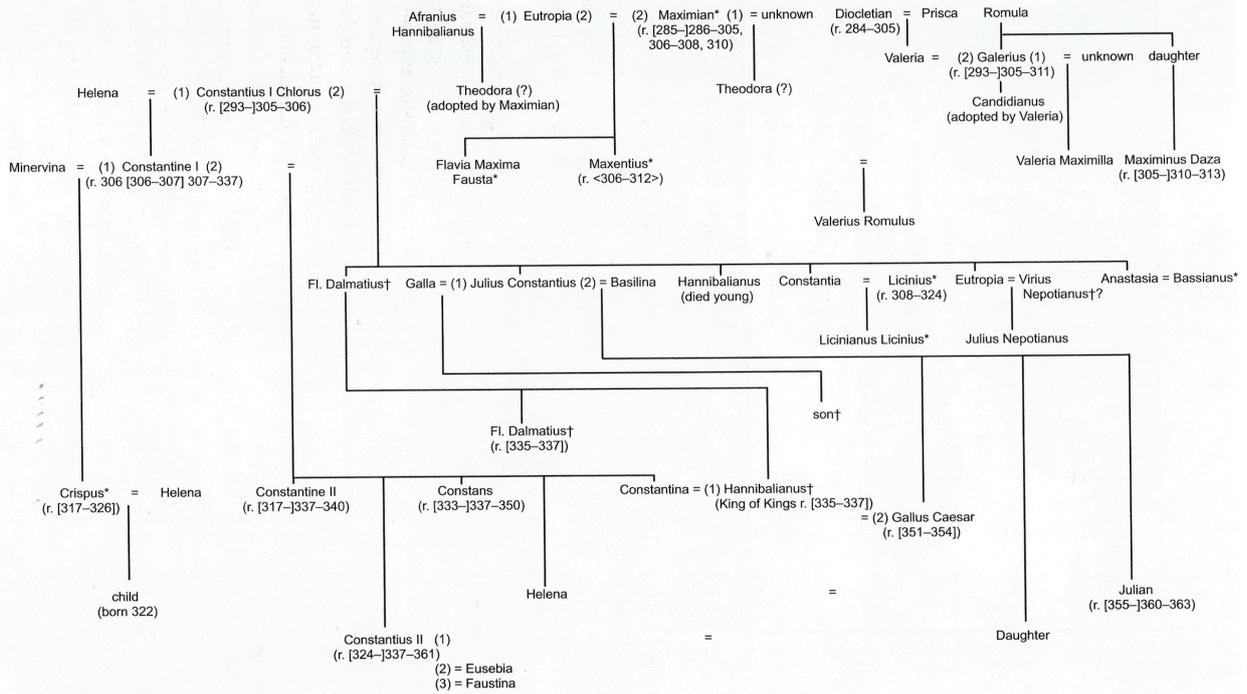
ティヴェレ川方向（東）を望む＊

## 三 テトラルキア体制下でのコ帝とマ帝

### コ帝の領土拡大過程図



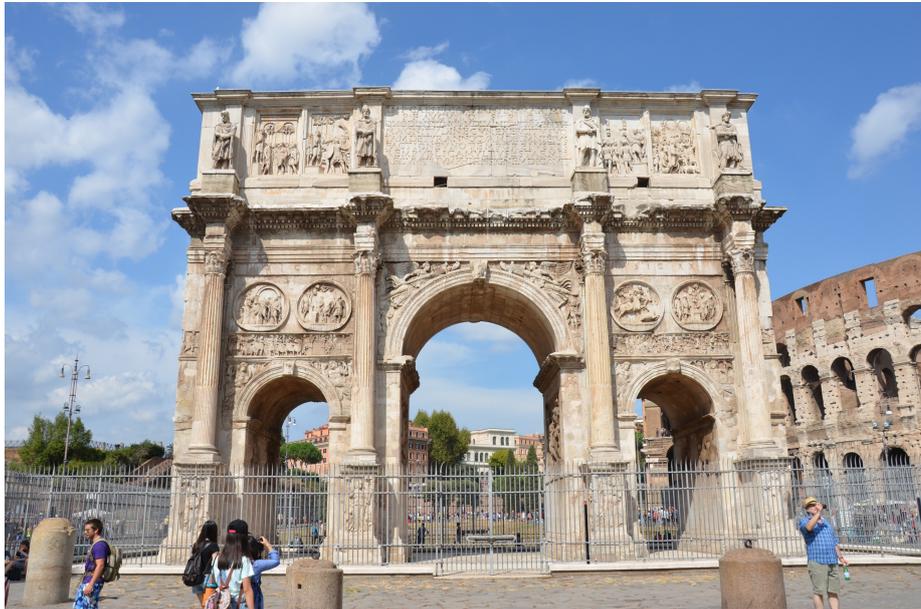
# テトラルキア相関係図



**Key**  
 Reigned as Augustus: (r. 284-305)    Reigned as Caesar: r. [293]    Reign not recognized: r. <306-312>    \* Constantine involved in the death    † Assassinated in 337

The Families of the Tetrarchs and Constantine

## 四 コ帝アーチ門にみるいわゆるミルウィウス橋の「戦闘」



コ帝アーチ門南面\*



コ帝アーチ門南面東側浮彫全図

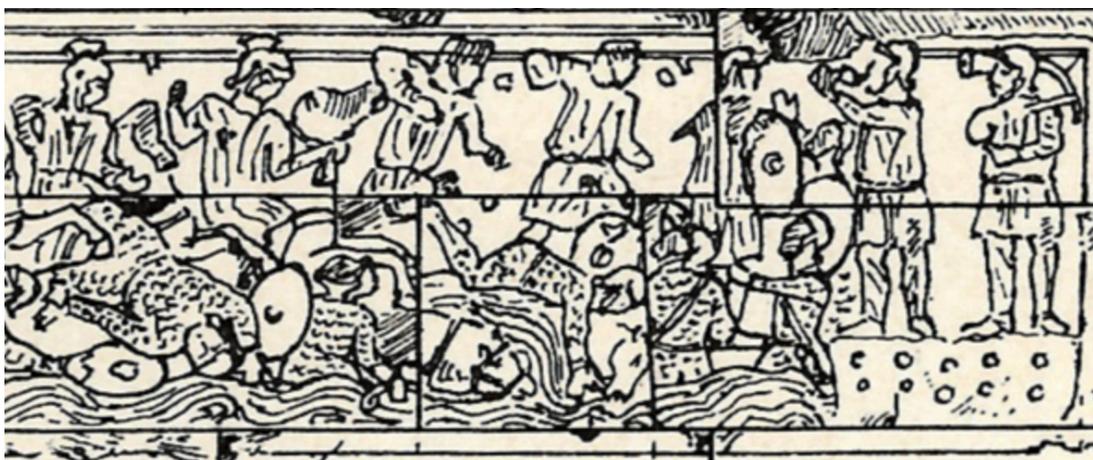
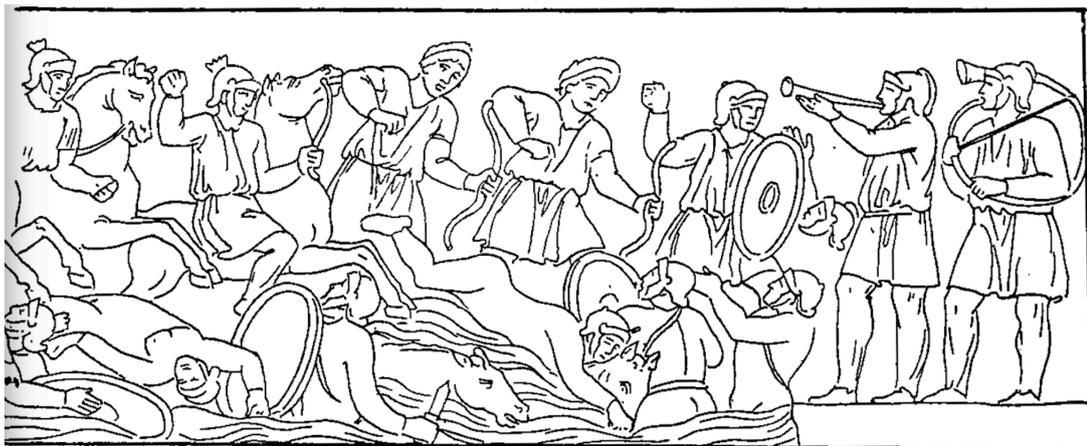
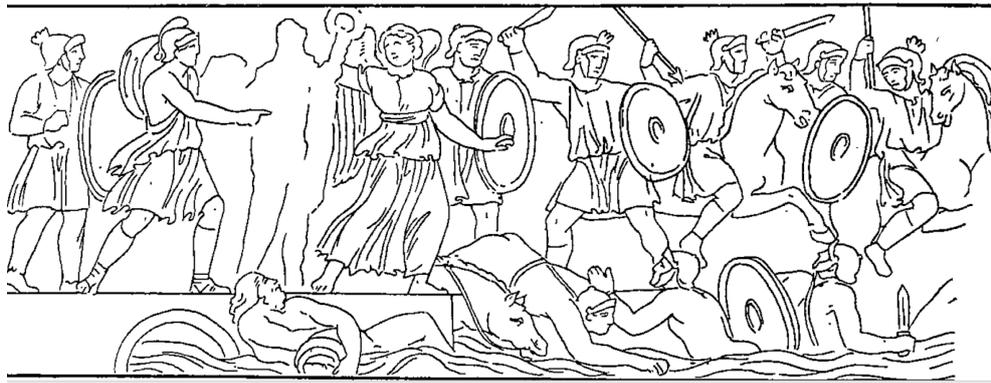


図5 帝アーチ門南面東側浮彫概念図

Salomon Reinach, *Répertoire de Reliefs Grecs et Romains*, Tome 1, Paris, 1909, p.254. 但し不正確な描写。  
 Hans Peter L'Orange u. Armin von Gerkan, *Der Spätantike Bildschmuck des Konstantins-bogens*, Berlin: de Gruyter, 1939, Abb.11 a.

コルヌーティ\*

兜の枝角状突起に注目



コルヌーティ参考図版\*

西面



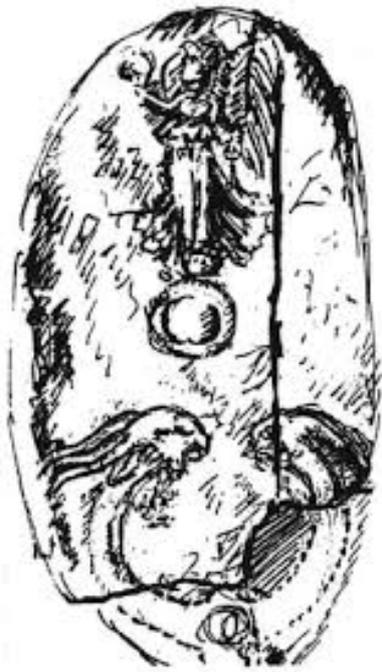
南面西側





敵城壁へ一番槍を付けた顕彰コルヌーティ

アーチ門柱脚に描かれたコルヌーティの楯装飾



勝利の女神ウィクトリア



双頭のドラゴン部分

「官職要覧」における楯裝飾図（アーチ門柱脚表記との相違〔女神像消失〕に注目）



Auxilia Palatina 所属 cornuti 用楯



歩兵 cornuti の想像図

南面東側レリーフ部分図＊



女神ローマ 河神 Con 帝 降伏騎兵 女神ウiktリア

騎兵＊



北アフリカ系（ムーア人）弓兵\*



北アフリカ系弓兵想像図

弓兵参考図版\*

アーチ門南面西側



皇母ヘレナ用石棺上の騎兵\*



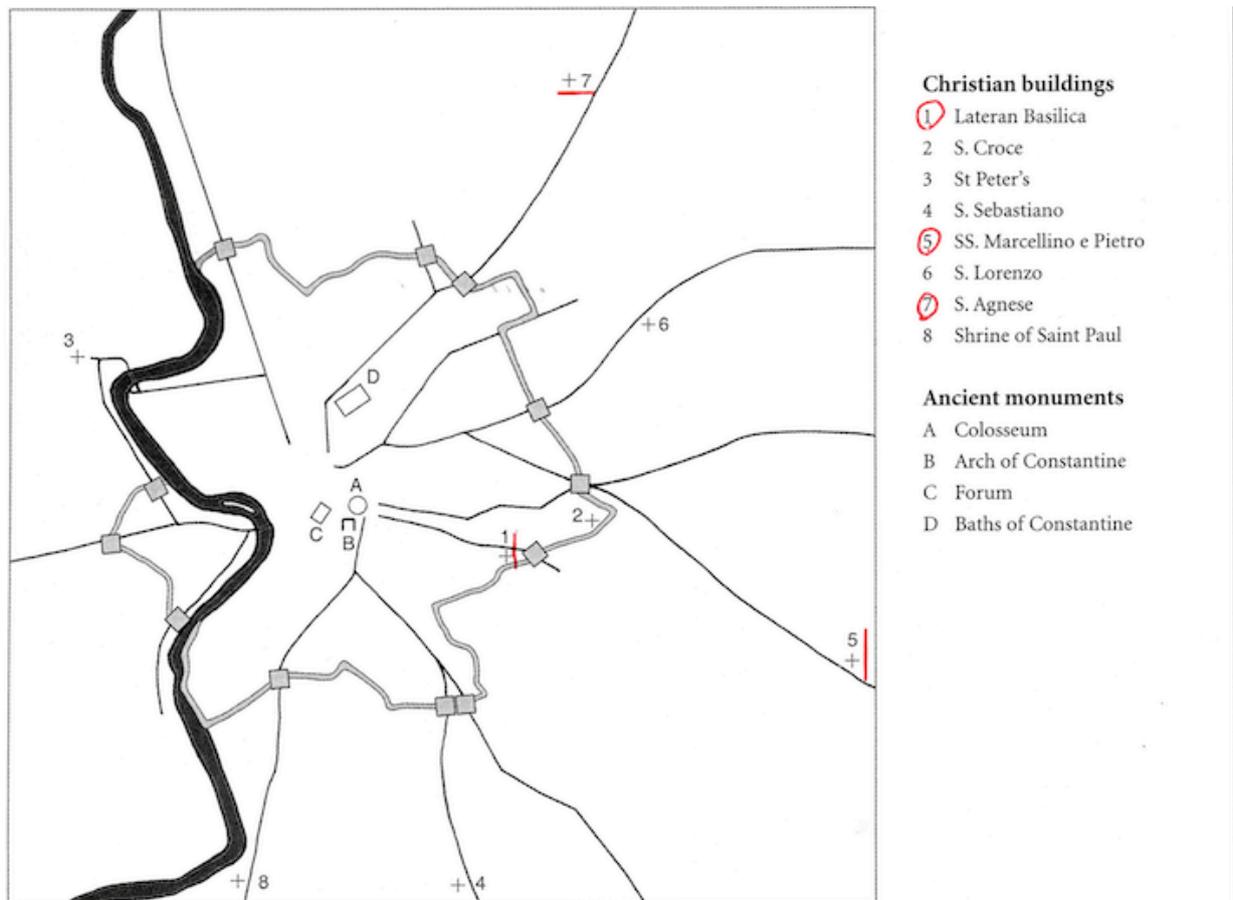
マ帝軍魚鱗甲冑騎兵\*



ラッパ兵 (ブキナ?とコルヌ) \*



## コ帝関連の帝都ローマ著名建造物



### 【付録】拙稿「裏切り者は誰だ！：コンスタンティヌス勝利のゲスな真実」

ヨーロッパでは現在、コンスタンティヌス大帝（以下「コ帝」）の事績 1700 年目が経過中で、研究が文字通り破竹の勢いで進展中である。3・4 世紀を専門としているつもり私だが、最新研究に触れると知らないことだらけの体たらく、今更ながらイタリアを中心とする西欧の学的蓄積に脱帽するしかない。知り得た一部を HP (<http://www.koji007.tokyo>) に載せているので、若い世代に関心を持っていただければと思う。ここでは、「僭称」皇帝マクセンティウスにまつわる、本邦初演の生臭いお話をご披露しよう。

312 年 10 月、帝都ローマは風雲急を告げていた。同年春に本拠地トリーアを発した義弟のコ帝軍が、フラミア街道をローマめざしてひたひたひたと迫っていたからだ。当初、マクセンティウスは籠城戦で臨むはずだった。307 年初めと秋にもこの手で西部正帝セウエルス軍と東部正帝ガレリウス軍を退けていたからだ。だがこの成功体験は、往時の複雑な政治情勢（第二次テトラキア体制のねじれ現象）によっていた。両軍ともローマ正規軍同士、しかも包囲軍主力はかつてマクセンティウスの父帝マクシミアヌス子飼いの兵で、なればこそ戦闘前に談合・調略の余地が十分あり、事実いずれの場合も兵士の寝返りで包囲側は撤退を余儀なくされた。だが、父帝は 310 年に女婿コ帝により自死に追い込まれ、もはやその威光に頼ることはできない。

マクセンティウスは突然籠城戦を棄て、打って出ることに決した。収穫期後で食糧備蓄は十分、季節も秋が深まりどうみても籠城策が有利だったのだが。10月24日、マルボル握の好機とみて周到に準備していたはずなのに、なぜかそれが裏目に出た。先行開催の競ゲット (Malborghetto) に達したコ帝軍は、4日間動かなかった。帝都はそこからわずか20キロ。28日はマクセンティウス帝位就任7年目開始の記念日で、主催側はむしろ人心掌握会でマクセンティウスへの不満を民衆が公然と叫んだのだ。これは皇帝にとって予想外の誤算だった。そして土壇場の26日、最後の皇帝顧問会議が招集され、拙速に出陣が決定された。

R. Donciu (2012年) は新見解満載の新著の中で、ローマ元老院の重鎮たちの皇帝交代前後の奇妙な去就の真相解明を試み、私見ではことこれに限って傾聴に値する。彼は、コ帝がローマ制圧後、前帝を支えていたお歴々をなぜか処刑も更迭もせず登用し続けた点を掘り下げる。従来もこの点は注目され、だが、元老院との融和と戦後の円滑な統治を図ったコ帝の友好策、と簡明かつきれいな事で説明されてきた。それが善帝にふさわしい振舞いというわけなのだろう。しかし政権交代時には処刑がつきもので、たとえば193年のセプティミウス・セウェルスのローマ入城時には、前帝ユリアヌス派として29名の有力元老院議員が処刑された。もともと元老院は競売で帝位に就いた前帝に冷淡だったのだが、それでもこれだけの犠牲者が出た。

Donciu は、マクセンティウス登極以降の有力官職在職者の動向を追った末に、皇帝顧問会議メンバー、とりわけ首都防衛を託された Annius Anullinus らの「裏切り工作」をあぶり出す。彼らは皇帝の面前では忠臣よろしくもっともらしい献策で皇帝を翻弄し、裏でコ帝と気脈を通じて事後に備えていた、というわけである。これをヒントに見直すとたしかに幾つも疑念が氷解する。私をもっとも奇妙に感じていたのは、激戦の割に情報が少なく、流布説では、ミルウィウス橋そばの仮設舟橋の崩壊がすべてと言わんばかりなのだが、あれは戦闘の最終段階にすぎない。たぶん勝ち組が闇から闇に葬った数々の裏切りの仕掛けがあったのだろう。

実際に古戦場を行きつ戻りつして、素人ながら気づいたことがある。そのひとつが、テヴェレ川が織りなす地政学的な特異性で、フラミア街道が走る右岸のすぐ西側には崖が切り立ち、その東の氾濫原をテヴェレ川は大きく蛇行して流れている。そのためプリマ・ポルタ (Prima Porta) からミルウィウス橋にいたる間に道幅のごく狭い地点が現在だと3箇所はある。そこに強固な防御線を張れば、季節はすでに雨期で水量もあったので、コ帝決戦兵器の重装騎兵といえども突破は容易でなかったはずだ。すなわち厳重な防御柵で迎え撃ち、機を見て虎の子の野戦機動軍を投入すれば、コ帝を敗走に追い込むことも可能だった。マクセンティウスは当然そう目論んでいた。いや、耳元でそう囁く重臣がきつといた。ところが三重の構えがたった1日も持たなかったのである。その上、舟橋が皇帝渡河時に狙いすましたように崩壊し、あろうことか総大将が水中に没し、混乱の極みにもかかわらず遺体も翌日直ちに識別されるなど、どう考えても出来すぎの話ではないか。

きつとマクセンティウスは溺死の断末魔で、声ならぬ声で叫んだはずだ。はめられた、きやつらに、と。

『地中海学会月報』389, 2016/4, p. 4 (ウェブ掲載) [一部修正]